

目次

田上時子のエッセイ 記録よりも記憶を	1
特集 発達障がいの理解と支援	2～3
活動報告 スター・ペアレンティング連続2回講座	4
エコキャップ推進運動	4
総会報告	4
CAPワークショップ	5
エルコラム⑨	5
リレーエッセイ 鈴木忍/西本佐兆子	6
講座インフォメーション	7
会員の紹介・入会のおさそい	8
編集後記	8

田上時子のエッセイ

記録よりも記憶を

目下、同居する母を介護中のため、夜の外出はご法度と自分に課しているが、数年前に縁あって会員になった公益財団法人 世界遺産賀茂御祖(かもみおや)神社境内紉(ただす)の森保存会から「蛍火の茶会」の案内があり、ホタルの幻想的な光を愛でたくて出かけた。

鴨川と高野川にはさまれる下鴨神社は、世界文化遺産に登録される京都最古の神社の一つでパワースポットとしても有名。平安時代前の原生林が残る「紉の森」が広がり、ホタルが舞うという6月中旬の一日、門前に京都の老舗約10店が出店する納涼市や門内での奉納祭や茶会で賑やかだった。茶会の締めくくりはホタルの放流だった。

みたらし団子の名の由来である御手洗池の周囲は放流されるホタルを鑑賞しようとする人々で身動きも取れない。夜8時きっかりの放流が始まるや、老若男女がいっせいにホタルに向けてカメラ撮影を始めた。「フラッシュはたかないください！」なんていう注意は誰も聞かない。デジカメのフラッシュの光源に負けて、ホタルの光も妖しく消される。一方、携帯カメラのシャッター音の

うるさいこと。盗撮防止のためだと聞いたことがあるが、ピシャ、パシャ、ピシャの音が公害に思えた。

それにしてもいくら最近のカメラは撮影されたフィルムが消去できるとはいえ、なぜ人はカメラ撮影に必死で記憶をカメラに納めようとするのか、いつから、日本人は自然鑑賞がこうも下手になってしまったのか。自然なホタルの優美な光の舞いを心で鑑賞できないものなのか。

江戸時代を代表する俳諧師の一人、小林一茶にも「蛍」を季語にした俳句も多い。

大蛍(おほほたる)ゆらりゆらりと通りけり
 さかづきに千(ち)れや糾のとぶ蛍

小林一茶が平成の今生きていたら、この光景を何と詠うだろうか。